

大浪花諸人往来第4集

京街道を走る 有明夏夫





大浪花諸人往来第4集

京街道を走る

有明夏夫

角川書店



京街道を走る

—— 大浪花諸人往来第4集 ——

1981年12月25日 初版発行

著 者 有 明 夏 夫

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話 03(265)7111(大代表) 〒102

振替 東京3-195208

大日本印刷・宮田製本

Printed in Japan 0093-872333-0946(0)

©Natsuo Ariake

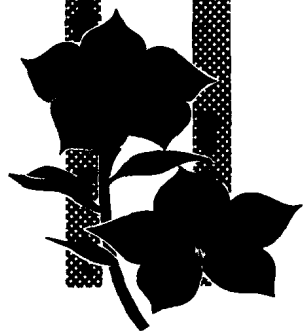
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

桔梗は見ていた	三
消えた土地	五
月へ旅する日	一〇一
京街道を走る	一六七
猫の災難	二〇一

装丁
玉井ヒロテル

桔梗は見ていた



淀川^{わかしほ}のほうから朝日町に入つてゆくと、見憶えのある女が数丁先を歩いてゐた。

源蔵は目を凝らした。藤岡志津のような気がしたのである。

もし彼女が志津だったとしても、源蔵の家へ向かつてゐるとは、ちよつと考えられなかった。一瞥^{いちべつ}ぐらいはするかもしれないが、たぶん前を素通りしてしまふだろう。しかし、そう思いつつも、源蔵は女の後姿から目を離さずに歩いた。

若死にしてしまつたが、藤岡志津の旦那は東町奉行所の盗賊改メ方^{よりき}だった。業績と才幹を見込まれて、同心の身分から異例の拔擢^{はつしやく}を受けたのである。旧幕中なら与力で行き止まりだが、当節は田舎の足輕風情が大臣になる時代だから、あのまま大きな器量を發揮し続けていれば、どこまで出世したか、見当もつかぬほどだ。

夫と死別した志津は、ずっと仕立物で生計を立ててきた。住まいは何度か変わったが、いまは河内町にある興正寺裏の長屋で、一人ひっそりと暮らしている。

前をゆくのは、やはり志津だった。元与力の妻だけあって、足の運びようが優雅である。左手に下げてゐるのは、どうやら花らしい。はて、どこへゆくのだろう？

大坂御鉄砲奉行所の同心の娘だった時分から、志津の美貌^{びようぼう}は四辺に鳴り響いてゐた。口さがない連中は、あの顔が旦那の命を縮めたんやで、と噂^{うわさ}していたくらいである。齡^{とし}と共にいくらか容色は衰えたが、その代わりに一段と増した落ち着きが、商家の女房連にはない品位^{びんい}を滲^{にじ}ませている。四民平等の世とはなつても、源蔵ごときが往來で気安く声をかけられる相手ではなかった。

だが、驚くべし、志津は源蔵宅の前で立ち停まったではないか。しかも、表戸に手を添えて、内部に呼びかけている。源蔵は夢中で駈けだした。

「お、お、奥さん——なんでおまつしゃろ!？」

われながら無様な声だと思つたが、志津が相手では是非もなからう。

「あら、親方——外へ出たはったん?」

にこやかに振り向いた彼女の表情は、道を急いできたためかいくぶん上気して、往年の色香を湛えている。

「へえ、ちょっとヤボ用で出かけとりましたもんで、えらいすんまへん」

「いえいえ、こつちこそ勝手にやってきてからに——」

「何をおっしゃいますやら——ほんで、わてみたいな者に、どないな御用だっしゃろ?」

「お報せいうたらええか、お願いいうたらええか、とにかく親方のお耳に入れとこ、思てきましてん」

「さよか——ほな、とりあえず承らして頂きます。むさくるしいとこだっけど、どうぞ入つとくれやす」

立て付けの悪い表戸を、源蔵は舌打ちしながらこじあけた。そして、招じ上げた志津に座布団を勧めると、大慌てで隣家へと走った。

「茶ア頼むわ。大事なお客さんやよつてに、番茶はあかんで。もつとええのにしてや」

「うちは番茶しかおまへんで」

隣家の女房はふくれっ面で応えた。

「ほんまにもう、貧乏人はしゃあないなあ」

「貧乏人でえらいすんまへんな」

声が大き過ぎる。それではお客さんに丸聞こえやないか。

「まあ、この際や、それで辛抱しとこ。なんぞ気のきいたお茶菓子はあるか？」

「安物の煎餅しかおまへんわ、うちは貧乏人だすよってにな」

「ほな、それでええわ。早いとこ頼むで」

再び家へ飛んで帰ると、志津は一部始終を聞いていたとみえて、吹き出しそうになるのを必死で堪えていた。

「どうぞもう、氣イ遣わんといとくれなはれや」

「氣イ遣おうにも、なんにもようしまへん。勘忍しとくれやす」

「あ、そやそや——」

志津はかたわらに置いていた花の束を差し出して言った。「これ、どこぞに飾つといて頂戴」

「へえ、どうもおおけに——」

花は桔梗ききょうだった。志津にはまことにふさわしい花である。見目麗うるわしい女に温雅な花をもらうとは、なんという倖しあわせであろう。源蔵の胸は妖まじしく震えた。

だが、花弁に鼻を近づけてみると、まるで匂いがない。これは一体どういうこっちゃ。

「ああ、それは造花やさかい、匂いは全然しまへんで」

「ひえっ、これが造花だったか！」

源蔵は驚いて桔梗をしげしげと眺めた。なるほどそう言われてみれば、花冠にも茎にも葉にも、わずかながら布目がついている。それに何より、水分がない。

「最近ちよっと始めてみたんだす。羽二重造花いいますねん」

「ほう——これは羽二重で付けてまんのか。鮮やかなお手並だんなあ」

お世辞ではなかった。少し距離を置けば、誰しも本物と見紛うに違いない。

「仕立物だけでは、時勢に遅れる思てね、ええ齡して習いに行きましたんや」

「なんのなんの、まだお若いもんだんがな——せやけど、こんだけの細工ともなると、手間隙（てまひま）かかりまっしゃろ？」

「慣（な）れてきたら、それほどやおまへんわ」

勧工場（かんこうば）へも造花を出しますねん、と志津は言つた。

一昨年の八月、江戸堀南通りの三丁目に、大阪府立勧工場が開設された。府下における種々の製造物を一場に蒐集（しゆしゆ）羅列（られつ）して、内外需要者に精粗鑑別（しやうそかんべつ）の便を与え、以つて工芸の振興を計る、というのが目的だと聞いている。もつとも、源蔵は興味がなないので一度も覗（のぞ）いていない。

「へえ、あないなとこへ出品（しゅひん）したはりまんのか。大したもんだすなあ——ほんで、評判のほうは？」

「お蔭（かげ）さんで、割に好評だす」

「そろそくだっしゃろ。奥さんがやったはんのに、評判を呼ばん筈（はず）がおまへんわ——早速、いっぺん見してもらいに伺いまつさ」

と、そこへ隣家の女房が、番茶と煎餅を持ってきた。先刻ボロクソに言つたのを償（たが）うつもりで、源蔵は桔梗の花を二本やつた。

「いやあ、これは造花だんな」

流石（さすが）に女だけあって、すぐに見抜いた。「うわあ、きれいにしたある！」

「それな、この奥さんが造らはってんで」

「そうだったか。やっぱり器用なお人はちやいまんなあ——」

それからひとしきり寝たあと、「これで仏さんの花買わんですむし、助かりますわ。おおきに」と、まことに貧乏人らしい科白を吐いて帰っていった。

「ところでね、親方——」

志津は改まった口調で言った。「働工場で起こったこと、聞いたはる？」

「いいえ、存じまへん。なんだんねん？」

「わけの解らん盗難事件が起きましてんがな」

昨夜、勧工場に泥棒が入ったのだという。いや、それらしい形跡がないので、入った、とみていかどうかは判らないが、とにかく金箔を押した漆器、莫大小製品、絹織物、精密時計、海豹の毛皮、象牙、鼈甲等が忽然と消えてしまった。まだ被害の総額は出ていないようだが、三万円を下りはするまいとの噂である。

「造花も盗られましたんか？」

「まさか——こんなもの、みんな持っていったかて、高が知れてますがな」

「わっはっはっは——」

源蔵は笑って取り繕った。「しかし、そないにようけ、どないして持ち出しよってんやろ？」

「それが判りまへんねんて」

「もう警察の手エは入ってまんねやろ？」

「きようは開場を遅らして、朝から調べてるそうだす」

江戸堀南通り三丁目なら、本署のお膝元だ。源蔵としてはすぐにも飛び出したいところだが、本署の縄張りにまで踏み込んで、余計な反発を買うのもあほらしい。

「しばらくは、様子を見たほうがよろしな」

それでも解決せぬようなら、しかるべき工夫をした上で、探索に乗り出してやろう、と源蔵は肚を決めた。

「まあ、とりあえず、親方のお耳にだけは入れとこ思て——」

「へ、ありがとさんでござります」

「ほな、まだほかにも用事があるし、きょうのとはこれで失礼しまっさ」

「なんにもお構い出来いですまへんな。堪忍しとくなはれ」

近所の子供にやるからと言って、志津は安物の煎餅を懷紙に包み始めたので、源蔵は手をつけていない己れの分をも勧めた。世が世なら、こんなものには手を触れる筈もないお人である。源蔵の胸はしきりに痛み、表へ見送りに出た時にも、志津の顔を正視し得なかったが、彼女のほうは至ってサバサバした態度で、しかも優雅な足取りで朝日町を離れていった。

旧幕中、赤岩源蔵は東町奉行所の御抱え手廻りを勤めていた。盜賊捕亡方同心に属して、まず名に恥じないだけの働きはしたつもりである。それが元治元年の夏、狩り出されて天誅組の殘党を討つべく河内へ出陣した折、敵に滅法腕の立つ侍がいて、彼は左の耳を削ぎ落とされた。この傷痕が顔に凄味を与えるらしく、お蔭でちよいと名の売れた親方になった。断髪した頭を左後方から眺めると、ただもうノツペラボウなだけなので、近所の者は「海坊主の親方」と囃し、なに吐かしやがる、と腹を立てたのも大昔のこと、近頃ではむしろ好都合だと思っている。明治の御代に入つてのちは、しばらく捕亡下頭として治安の一端を預かつていた時期があり、その縁でいまなお厄介な事件を持ち込まれることは多い。が、志津がわざわざ報せにきてくれたのは、源蔵にひとつでも多く手柄を立てさせてやりたい、という慮りからのようだった。

その夜、源蔵は手下の安吉を呼び寄せて、勸工場の様子を探るように命じた。

「ええか、本署の連中には覚られんよに動けよ」

「へ、承知しました」

親方自身が赴きたいのは山々だが、いま下手に嗅ぎまわるのはまずい。竊に障ることに、去年の暮あたりから、目明かし探偵の類は使わぬ、と警察は明言しているのである。もとより、それは表向き姿勢であつて、源蔵はいささかも斟酌なぞしていないが、本署が相手となると、傍若無人に振る舞うわけにはゆかぬ。なろうものなら、本署が苦心しているのを尻目に、海坊主の親方が颯爽と犯人を召し捕る——とこゆきたいところだが、さて、そううまくゆくかどうか。源蔵はイライラしながら一日を送った。

手下が戻ってきたのは夕方である。汗臭い匂いを全身から発散させていた。

「どや、もう犯人は搦まったか？」

「それどころか、どやつて入つて、どやつて出たかも判つてまへんわ」

開けたり傷つけたりした痕跡は、建物のどこにも見られないという。警察は出入りした者を風潰しに調べているが、怪しい奴は一人もいないらしい。

「ふーむ。けつたいな話やな」

「あれはどないなつてまんねやろ？」

そんなこと訊かれたつて、現場を見ていない源蔵に答えられる筈がない。だが、本署の調べに進展

がないのは、この際喜ばしいことである。よし、海坊主の親方が失敗しても、面目は失わずに済むというものだ。

「ようし、あしたいっぺん行ってみよ」

「ほな、わては一旦ここへ寄してもらいまひよか？」

「いや、おまえは引き続き、一人で尋ねて歩け」

差し当たっては、仰々しくしないのが得策だろう。「向こうでわしに遭うてもな、知らん顔しとれ」
「へ」

翌朝は雨だった。そろそろ梅雨に入っただのかもしれない。源蔵はもらいものの新しい蝙蝠傘をさして出掛けた。

最初は直接勤工場へ赴くつもりだったが、人力車を呼びとめた時に考えを変えた。その前に、曾根崎警察署へ厚木寿一郎九等警部を訪ねておこう、と思ったのである。進むも退くもそれからだ。

曾根崎警察署は、霧雨の中に煙っていた。建った当時は周辺に家もなく、一軒ボツンと淋しい印象だったが、三年目ともなるとかなり賑やかになって、結構警察署らしい貫禄がついてきた。とはいえ、昔の奉行所に比べると、月とスッポンの差である。

源蔵は堂々と玄関から乗り込んでいった。近頃、他の探偵のうちには、コソコソと裏口から出入りする者もいるらしいが、源蔵は真平である。海坊主の親方に、そないにしみつたれた真似がでるか。九等警部は自分の席で、一等巡査と小声で熱心にしゃべっていた。源蔵はちと口を出しにくい気がしたので、誰もいない小使部屋に入って足を拭き、茶を飲んで煙草に火をつけた。

幕政時代、厚木寿一郎は東町奉行所の同心だった。盗賊捕亡方きつての遣り手で、十手取縄の使用に与っていた源蔵にとっては、二十年來の因縁である。最初は格別鼻屑にしてもらったほうでもない

が、元治元年の夏、源蔵が天誅組の殘党に左の耳を削がれた折、一緒に戦っていた寿一郎も右脚を斬られてしまい、それ以後二人は急速に親しくなった。

厚木寿一郎が九等警部に出世したのは一昨年の秋である。一等巡査に据えおかれた時期は長かったが、警部の肩書がついてからの昇進は、まずまずというところだ。もともとは力量のある人物なのだから、この先は更に勢いをつけてドンドン駆け上がってもらいたい。彼が出世すれば、源蔵の羽振りも良くなる。互いに持ちつ持たれつの間柄であることは、新政府になっても変わらない。今度の場合、犯人捕縛で本署の鼻をあかせば、当然寿一郎の出世に大いに役立つだろう。

そろそろよからう、と思つて源蔵は小使部屋を出た。もう一等巡査の姿は見えず、寿一郎は腕を組んで、天井を睨んでいた。

「えらいむつかし顔したはりまんな」

「いや、別にそんなわけやない——なんぞ用事か？」

寿一郎はかたわらの椅子を顎でしゃくつた。

「へ、おおけに——」

源蔵は恐縮しつつ腰をおろした。「旦那、勘工場の一件はどないなつてまんねん？」

「うーむ、どうも芳しくないやな」

「ここの署からも、どなたか出向いたはりまんのか？」

「いや、誰も行つとらん。顔出しでける道理もないやろ」

「まだ、全然目処がついてないようだな」

「そうらしい」

「小当なりに当つてみまひよか？」

「氣イつけよ」

寿一郎は声を落とした。

「呑み込んだりま」

「勧工場の面倒みてゐるんは、府庁せいふの勸業二課や。向こうの課長は柴田昌介いうてな、わしは面識があるねん。あの人に頼んだら、目立たんように動けるやろ」

「そいつはありがたい」

源蔵は思わず掌を打った。流石に九等警部や。やっぱりここへきてよかった。

「ただし、くれぐれも無理すんなよ」

「へ、旦那の顔を潰すよなことは致しまへん」

警察各署間の競争は激しい。同じ署内でも、各警部は抜け駆けの功名を狙っている。下手に動いて、寿一郎の出世を妨げるようなことにでもなったら、死んでも死にきれぬ。

曾根崎警察署を出ると、先刻と同じように霧雨が降っていた。源蔵は梅雨が嫌いだ、それでも、このあとにくる暑い季節よりはまだましである。それに蝙蝠傘というのは、存外にさしやすい。彼は大江橋の袂たもとまでブラブラ歩いて、出食わした空の人力車に乗り込んだ。

勧工場は開いていた。内部へ入ってみると、奥行きは予想以上に深く、铸件類、牛馬具、皮製品、油絞り機、人力車、素焼陶器、硝子鏡などが、ところ狭しと並んでいる。これらはみんな府下で造られたのかと思うと、つくづく大阪の地が頼もしくなってくる。東京がいくら頑張っても、これだけの活況は望めまい。が、雨のせいとか、縦覧者は三十人ほどが目につくだけだった。

ずっと見てまわりたくなかったが、いまは御用を優先させねばならぬ。源蔵は出品物を見張っている看護人に、柴田課長がいる場所を訊くと、相手は海坊主の親方をよく知っていたようで、わざわざ部

屋の前まで案内してくれた。

柴田課長は席にいた。厚木寿一郎との付き合いは、さほど深くもなかったらしいが、それでも好印象を抱いていたとみえて、応対は愛想が良かった。そして、これまた嬉しいことに、海坊主の親方が活躍するさまを、面白がってくれている人物だった。旧幕中は何をしていたのか、源蔵は大いに興味をひかれたが、

「本署のお人らはきたはりまっか？」

と、急ぐ用向きをまず尋ねた。

「朝のうちはきてたけど、じきに去にましたで」

「なんぞ、手掛かりは擱めたようでしたか？」

「さあ——それはまだとちやいますかなあ」

まるで、他人事ひとごとのような口振りである。それも道理、場内の出品物を保護監督するのは、確かに勸業二課の役目ではあるが、火災盗難など人力の及ばざる非常の損害については、弁償の責任を負わずに済むのだという。高みの見物とまではゆかないが、慌てふためく必要もないのだった。

「どやって盗み出しよったか、課長はんは見当つかはりまっか？」

「つきまへん。私もあっちこちまわってみたけど、全然判りまへんわ」

「さよか——ほな、いっぺん見して頂きまっさ」

「どうぞどうぞ。じっくり見とくなはれ」

親切にも、柴田課長は看護人を案内役につけてくれた。

盗まれたのは、ほとんど二階の出品物だとのことだったが、折角の案内ゆえ、源蔵はひとまず一階をまわった。しかし、どこにも不審な点はない。それで、建物の外周も一巡してみたが、何も発見出